

海の奇談

古代の海の航海と 発見の話

宇田 道隆

(東京大学名誉教授)



1555年の本に出ているクジラトリのありさま

船を造っている。五千年前の大昔、古代エジプトでかなり大きな船がつくられて人間が漕ぐだけでなく、風を利用する帆をマストに張っているのはおどろかさ

秘密にしようとしたので、書き物には残さぬようにした。

貿易の範囲は紅海から、シリヤ、ソマリランド、アラビア、インドに及び、中国の方から、太平洋にまで行っていたのでないかと想像されている。大洋航海と共に造船も盛んになり、船の幅をひろげ大船をつくり、西紀前千二百年頃は首都

ティレが地中海の航海の中心となって栄えていた。

イスラエルの王様ソロモンは、西紀前一〇世紀ごろに栄華を誇ったが、ティレの王のハイラムと親しかったので、彼の大船隊で地中海からアフリカ方面にま

で貿易の手をのばし、金銀、象牙、類人猿（ゴリラ）、孔雀など珍しいものをイスラエルの官廷に集めた。「ソロモンの栄華も野の百合の花にしかず」という有名な言葉にもこういう背景があった。

西紀前六百年ごろにはフェニキヤ船隊は、エジプト王の命令でアフリカを三年かかって一周したといわれている。フェニキヤの船乗りたちは、ジブラルタル海峡から大西洋へ出て、北西スペイン、南西英国のスズ鉱石のとりひきまでしておりバルチック海の方へ琥珀を求めて航海したもようである。フェニキヤの植民地だったカルタゴのヒムリコは西紀前五百年北航の途中ビスケイ湾あたりに群遊する鯨をみて、「海の怪物」とおそれ、さわいだ。

フランス、スペイン沿岸に来ると、地中海の潮汐の干満の小さいのちがって干潮になると一面見渡すかぎりの浅海になったのにびっくりしてしまった。

西紀前三三〇〇年、マツシリア（今のフランス国マルセイユ）の人ピリアスはじめて科学的な探検航海に大西洋へのり出し、英国をめぐってジブットランドか

フェニキヤの航海商人

世界の海洋を人類が開拓して来た歴史は数千年前の大へん古い時代からはじまっている。

エジプトの王様の墓のあるピラミッドの奥に、世界最古の造船の図が描かれてあるのが見つかったが、板片を合わせて

ら「真夜中の太陽」の見える国（ツール）

へ向い、太陽が沈んだかと思うと二、三時間のうちに昇って来るような高緯度の

パッフィン湾、ニューファウンドランド、

ノバスコチアにまでノルマンの活動範囲はひろがった。

も大きな関連があるように思われる。（柳田国男「海上の道」参照）

ポリネシアの航海者は竹の組わく貝

究した。ノアの供水のあとでノアは箱舟から鳩を飛ばして、陸地を求めた。

昔は鳥を船にもって行ってそれを放し

ついている。
エジプトの王様の墓のあるピラミッドの奥に、世界最古の造船の図が描かれてあるのが見つかったが、板片を合わせて

ら「真夜中の太陽」に見える国(ツール)へ向い、太陽が沈んだかと思うと二、三時間のうちに昇って来るような高緯度のアイスランドかノルエーの近海へ到達して、海水の凍りはじめて寒天か何んかのようになるさまにびびりして帰っている。

ヴァイキング時代

次はヴァイキングの活動時代にはいるが、いわゆる文化の暗黒時代に大西洋で彼らの冒険と発見がなされていたのは面白い。

西暦八七〇―八九〇年、ノルエーのオッタルは、バレンツ海、白海に海象の牙をもとめて航海し、陸地もさぐり、その後英国を訪ねてアルフレッド大王にあってゐる。

このころから北洋の水と暴風、寒氣とたたかうヴァイキングの果敢な海外への活動がはじまった。

彼らはコンパス、天文器械ももたずに屋根もなく、四角な帆を操って、太陽、月、星をみながら航走した。何日も何日も濃霧の中を、荒天の中を、陸も見えない沖合を彼らがどのようにして航海できたか、くわしいことは今でもなぞとされている。ともかく東北はノバヤゼムリヤ、スピツベルゲンから西はグリーンランド、

示す海図をつくっていた。そのうちに天文を学び、陸の見えぬ沖でも太陽と星をみて航海する術を知った。しかしその貿易の航路や積荷を得た場所ではできるだけ

バッフィン湾、ニューファウンドランド、ノバスコチアにまでノルマンの活動範囲はひろがった。

八七四年にはアイスランドに植民地をつくり、三年後にはグリーンランド東岸へシケで漂着、九八二年にはグリーンランド西岸に大植民地をつくった。二千年ころは米国のニューイングランドのコード岬付近に到達し、ルーン文字の石ぶみ等を残した。彼らはタラ漁などやり、時には捕鯨もやった。捕鯨を本格的にやったのはバスク人で、だんだん沖までのり出した。

ヴァイキングは英仏沿岸から地中海まで南下した。彼らの後裔なり、たましいを受けつぐ航海者たちがコンパス、マガマ、マゼラン、ドレイク、タスマン、ペーリング、クックなどになって千四百年代から千八百年代にかけて大発見探検航海の次の時代をつくり出した。

海図は「富への道」、「帝國のカギ」とされ、貿易の秘密を守るために門外不出だったが、十八世紀ごろからようやく公開、刊行されるようになった。

太平洋ではポリネシアの人々の大活動が二千年くらい前からアジアの南東より太平洋に向ってはじまっていた。それはフエニキヤ人の活動とほぼ同じ時代である。古事記に現われた日本民族の動きと

イスラエルの王様のソロモンは、西紀前一〇世紀ごろに栄華を誇ったが、テイレの王のハイラムと親しかつたので、彼の大船隊で地中海からアフリカ方面にま

も大きな関連があるように思われる。(柳田国男「海上の道」参照)

ポリネシアの航海者は竹の組わくに貝がらをくっつけた独特の海図をつくり、これをつかいて太平洋諸島の間の約三千マイルの広域を航海している。

カタマランという巨大な双子カヌーにわたした床をはり、二百人もせて、昼は太陽を、晴れた夜は星空を仰いで、驚くべき航海をやりあげた。

水色の変化を注意し、水平線下でも磯に碎ける波のたてるもやを見、熱帯海上の片雲からその下に島の存在することを遠くから知り、卓越風とウネリの交錯から島の位置を見当つけ、島の飛び方も研

消える島動く島

西紀前三〇〇年、マシリアの人はランス国(マルセイユ)の人ビテラスがはじめて科学的な探検航海に大西洋へのり出し、英国をめぐってジョットランドか

究した。ノアの供水のあとでノアは箱舟から鳩を飛ばして、陸地を求めた。

昔は鳥を船にもって行ってそれを放して行手をきめた。よく軍艦鳥など使ったポリネシア土人はタヒチ、ソロモン諸島からニュージランドへ、シャイニング・カッターという鳥に導かれて行ったという。タヒチからハワイ諸島へ移って来たのは十三世紀でこれがポリネシア人のカヌー大船隊最後の航海であった。

日本人の海洋活動は、一八二二年―一六三五年に、和こうから御朱印船と唐天じくの南方への航海が鎖国まで続いた。

志摩 達 夫
(海洋作家)

海に沈んだ火山島

「世は宇宙時代である。現代の海に神

秘はない」と、よくいわれる。だが、深海の不ふしきは、まだ、きわめつくされていないし、地表のおよそ三分の一をしめ